（二〇一一年度）

2　国語問題（六〇分）

（この問題冊子は19ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、携帯電話・ＰＨＳの電源は切ること。
三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
五、**解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、筆記具は、**ＨかＦかＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
七、マークをするとき、枠からはみ出したり、枠のなかに白い部分を残したり、文字や番号、枠などに○や×をつけたりしてはならない。
八、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
九、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。採点が不可能になる。
十、試験時間中に退場してはならない。
十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

AK-A-02

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ことばもうたも、身体を離れてはありえない。ある言語を第一言語とする話者は、その言語の調音基底 articulatory basis、つまりその言語を特徴づける調音習慣の全体に、多くは幼時からの長いあいだの、その言語での発話の繰り返しによって、調音器官が協調的に働くように条件付けられている。うたう場合は、関与する発声・調音器官の範囲が日常的な発話よりさらに広いので、一度条件付けられると、関与する諸器官のあいだの協調的な反射的運動連鎖によって、なかば自動的な反復がより容易になる。一旦覚えたうたは、時がたってもうたいはじめると自動的に続けられるし、掛け算の九九のように、ある抑揚とリズムをつけて子どものころに覚えて使いつづけると、一生楽に反復できる。

このように、条件付けられた身体技法という観点から、[1]一旦覚えたうたは、たとえことばの意味がわからなくてもうたえるという事実も、理解できる。私の幼い頃元旦に家族そろってうたう習いだった長唄『鶴亀』の「月宮殿の白衣の袂」からのくだり、小学生低学年の頃聞き覚えた「函谷関も物ならず」の『箱根八里』や「天勾践を空しうする莫れ」の『児島高徳』など、長い間私は歌詞の意味が分からないまま平気でうたっていたし、中学三年生のとき音楽の先生の好みで、モーツァルトの『アヴェ・ヴェルム・コルプス』をラテン語で覚えさせられた時も同様だった。[2]韻律的特徴などによってよそおわれていない日常的な発話では、意味の理解できない言述を長々と一人で話すことはきわめてむずかしい。

同様の、「うたう」行為における言述の自律性とメッセージ伝達の拡散性とともにある[3]自己回帰性、つまりモノローグ(独話)として成り立つと同時に、発信されたメッセージを発信者自身が享受するという性格は、月下の夜道を独り歩きながらとか、湯に独りで気持ちよく浸りながら、快い軽作業をしながらというように、誰に聞かせるのでもない場で、長々とうたうことがありうるという事実からもみてとれる。このようなうたのメッセージの自己回帰性は、うたう行為が平常の発話の場合より密度の高い身体性——肺や発声器官のより強度の使用、調音器官のより広く複雑な使用——を必要とすることと関連しているだろう。さらに、うたう自分の声が、聴覚器官の外側からでなく内側からじかに伝わってくるという、[4]伝達の無媒介性とも関わ

りがあるだろう。

うたのメッセージの自己回帰性、というよりうたう自分の身体の器官を密度を高めて使うことで、身体の内側からメッセージを感得する性格は、同じうたでも人がうたうのを聞くのではなく、[5]自分でうたうことで得る情動の強さからも納得できる。クリスチャンだった義母の急死のあと、遺族が遺体を囲み、牧師の先導で、神の御許にゆく歓びをうたった賛美歌(四八八「永生天国」)をうたわせられたときも、自分の声でうたうということで身体の内側から突き上げてきた、予期しなかったほどはげしい悲しみに襲われて、それまでは出なかった涙が抑えようもなくこぼれた経験がある。

往年のアメリカ映画『カサブランカ』で、ヴィシー政権下の「自由フランス」に同情的なリック(ハンフリー・ボガート)の経営する酒場で、ドイツ軍兵士たちの傍若無人な高歌高唱に耐えかねた、ポール・ヘンリードの扮する潜行中の自由フランスの活動家ラズロが音頭をとり、『ラ・マルセイエーズ』を、酒場にいた人たちが合唱するシーンがある。うたううちに皆興奮し、同じ愛国精神に結ばれた感動にひたって涙を流しながらうたう、それがレジスタンスの気持ちを昂揚させるのだが、これも単にうたを聞くのではなく自分の身体器官を動かし、自分の息を吐いてうたうことによる身体的自己触発が、うたのメッセージの自己回帰性を生みだしているとみることができるのではないだろうか。

「うた」が発話として自律性をもち、モノローグでありうることは、先に挙げた粉挽きうたもそうだが、うたが差し向けるメッセージの受信者の不特定性、つまりメッセージの拡散伝達性につながる。セレナーデのように相手を特定して、秘(ひめ)やかに発信されるものもあるが、西アフリカで発達したグリオの褒めうたや日本でも長持唄などのような祝儀唄では、褒めることばが差し向けられる相手が特定されていても、それが同時にそこに居合わせる人々にも聞かれることによって、褒めることの社会的な意味が成立するといえる。メッセージ伝達の方向にみられるこのような特質は、他に誰もいない場での二人だけのダイアローグ(対話)――ことばによそおいがなく、相手から返ってくるメッセージに応じて、こちらから次のメッセージが生まれるような発話のやりとりとして、視覚的な文字を媒介としてはいるが、[6]パソコンのメールによる交信は、そのようなダイアローグの例として位置づけられる――の対極に、ことばの伝え合いとしての「うた」を位置づけることを可能にする。

同時に、「うたう」ことが、調音器官の協働的運動連鎖など、うたう本人の身体の生理の深奥に直結しているからこそ、本人の意識された制御や日常的配慮を離れた部分から「うた」のメッセージは生まれ、宛先を特定しない「ことば」自体として放出される、一種の聖性を帯びた声ともなりうるのであろう。「うた」、歌、謡、cano、carmen などの語が、日本語、漢文、ヨーロッパ語のそれぞれでもつ語義や意味場も、必ずしも個人の自由意志に属さない、メッセージを運ぶ声としての「うた」のあり方を考える上で、つねに単一ではないが興味深い示唆を与えてくれる。[7]

「うた」は、大野晋らによれば、「うたがひ」「うたた」などと同根で、自分の気持ちをまっすぐに表現する意であるが、白川静は、祈りのときの特殊な発声を指す「うたき」(吼き)と関係する語であろうとしている。その白川によれば、「歌」は呵、訶などと一系で、祝祷の器を柯枝で呵責して成就を求める意であり、その祈る声を呵、訶といい、その声調のものが歌であるという。他方、折口信夫は「歌ふ」と「訴ふ」の意味場を重ね合わせて考えていて、元来「うたふ」という形で「うったへ」たのだとしている。私はアフリカでの、上述の粉挽きうたや、お話のなかで異界と人間界を結ぶメッセンジャーとして重要な鳥と蛙の「うた」などに接した体験から、長いあいだ折口説に共感していたのだが、国語学的には折口説は支持され難いようだ。藤井貞和は一九七三年にすでに、遠藤嘉基の研究に依拠して折口説を否定し、同時に一種の恍惚状態、オルギーとしての「うた状態」とでもいうべきものに「うた」の原始の姿を見ようとし、その主張を最近もくりかえしている。大野晋らは、訴(うたふ)、訟(うたふること)などの用例の「う」の右下には朱点があって、促音であることが示されているとしている。謡は白川によれば、過酷な労役に耐えかねて逃亡する隷農の発する呪詛(じゅそ)の意を含む用例のほか、童謡における無為的な讖言(しんげん)の意味があったという。

フランス語の chanter、chant はじめ、ロマンス語系の「うたう」、「うた」を意味する動詞、名詞の語源になっているラテン語の cano、carmen は、いずれも予言や呪言に元来関わる語だ。フランス語の charmer (呪力で魅了する)、日本語にも入っている英語の charm、charming にも例をみるように、「うた」がもとになって、呪力の意味をもった語を派生させている。

うたの含む力の、このような日常的人為をこえた超常性は、これまでに指摘してきた、うたうことの身体性とも結び合わさ

れて、多くの社会のイニシエーション儀礼で、うたと踊りを新入者に課す慣行を生んできた。現代の日本社会でも、学校や会社の新入生・新入社員歓迎会などで、新参者が歌をうたわせられることは多い。[8]この時新参者に求められているのは、上手にうたうことではなく、皆の前で身体諸器官を使って声を出して「うたう」という行為によって、仲間入りを果たすことなのだ。

（川田順造『文化を交叉させる　人類学者の眼』）

〈注〉＊第一言語…幼少期に自然に習得した言語。母語。　＊グリオ……西アフリカの職業的口承伝承者。　＊先に挙げた粉挽きうた…西アフリカ・モシ族社会において、女性が粉挽きの際にうたう単調でリズミカルな身体動作を伴う作業歌。
＊柯枝…木の枝。　＊オルギー…らんちき騒ぎ。　＊讖言……予言。　＊イニシエーション……社会生活において特定の集団に加入する際に行われる儀式。通過儀礼。

問一　傍線部1において、なぜ「一旦覚えたうたは、たとえことばの意味がわからなくてもうたえるという事実」が「理解できる」のか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　うたというものは、ことばと同様に身体を離れてはありえないものなので、一定の所作を伴いながら反復すれば、自動的に発音のための器官が協調して動くようになるものだから。

b　うたう場合には、通常の会話に比べて、発音のために用いる器官の範囲や働きがより広くなるので、それらを繰り返し協調的に働かせることを通して、歌詞が抑揚とリズムを伴いながら自然と身に付くから。

c　うたう場合には、単にその歌詞を暗記する場合と異なり、抑揚やリズムをいかに付けるかが重要となり、歌詞の文言を誤りなく再現することが二次的な問題となってくるから。

d　うたというものは、その言語を第一言語とする話者にとっては、無意識的にその抑揚とリズムを感得できるものなので、それを繰り返しうたうことによって、記憶が強化されるから。

問二　傍線部2における「日常的な発話」はどのような性質を持ったものと考えられるか。次の中からその例として適切でないものを一つ選べ。

a　定まった抑揚とリズムを伴っていない

b　語のアクセントを必ずしも守っていない

c　七五調のような音数律に従っていない

d　韻を踏むような特徴を持っていない

問三　傍線部3「自己回帰性」とはここではどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　聞き手がいない場であっても、うたう主体である自分が同時に聞き手となり、自分のうたう声がうたっている自分に影響を与えるということ。

b　他人のうたを聞くのではなく、自分でうたうという行為が、自身の身体に日常にはない変化をもたらすことがあるということ。

c　自身の持つ発声するための器官を、密度を高めて使うことによって、その効果が情動の高まりとして自分に返ってくるということ。

d　発信されたメッセージを、聞き手がいない状況に置いても、モノローグとして受け取ることを通して、うたうという行為が成立すること。

問四　傍線部4「伝達の無媒介性」とはここではどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自分のうたう声が、空間を音波として伝わることなく、自分の発声器官から身体を通して受け取られるということ。

b　自分のうたう声が、物理的な過程を経ることなく、直接自分の感情に働きかけてくるということ。

c　自分のうたう声が、メッセージの解釈を必要とせず、そのまま自分の情動に影響を与えるということ。

d　自分のうたう声が、音として伝わる前に、調音器官のより複雑な使用として認識されるということ。

問五　傍線部5についてなぜ「自分でうたうこと」が「情動の強さ」を得ることにつながるのか。その理由として適切なものを二つ選べ。

a　自分の中に押し込められた感情が、体の中から息を吐き、声を出すことを通して、解き放たれることになるから。

b　自分で息を吐き、うたうことが、悲しみや怒りといった負の感情を解放し、精神が浄化される効果を持つから。

c　うたのメッセージの自己回帰性が、自分でうたうことを契機として、身体的自己触発を促すことになるから。

d　自分でうたうと、身体をより密度を高めて使用するため、うたうことが直接自分の情動を刺激することになるから。

e　他者のうたを聞くだけでなく、そこに自分が加わることで、場の連帯感を共有することができるようになるから。

問六　傍線部6「パソコンのメールによる交信」を筆者はどのような性質を持つものと考えているか。次の中から適切でないものを一つ選べ。

a　メッセージがモノローグのような自律性を持っていない。

b　特定の相手との双方向のやりとりから成り立つ。

c　文字を媒介とすることにより、はじめてダイアローグを可能としている。

d　メールを書き、相手とやりとりする場に、第三者が介入しない。

問七　傍線部7について、以下のA・Bに答えよ。

A　〈宛先を特定しない「ことば」自体〉とはどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　うたう本人の生理の深奥と結びついているため、聞き手を決めることが原理的に不可能なメッセージ。

b　自身の身体性に従いながら、情動をそのまま吐露した自己回帰性に支えられたメッセージ。

c　聞き手へ送るというような意識から解き放たれた、その場にいる人間が等しく共有することができるメッセージ。

d　うたの持つ韻律的特徴さえも、ついには問題とならなくなるような自律的なメッセージ。

B　筆者は、なぜ〈「うた」のメッセージ〉が〈一種の聖性を帯びた声ともなりうる〉と考えるのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　「うたう」ということは、身体の生理と深くつながっており、本人の意識的な配慮や制御が不可能な行為であるため、そこから生まれる声には、日常性を超越した響きが伴われるようになってくるものだから。

b　「うた」ということばの語源が「祈り」に関わることからも分かるとおり、「うたう」という行為は、通常、宗教性を帯びながら遂行される本質を持っているから。

c　「うたう」という行為は発話として自律性を有しており、その自律性は「うたう」人間の意志を裏切っていく存在であるため、結果として人間の意志で統御できない超常性を帯びることになってくるから。

d　「うた」は、「うたう」個人の意識や配慮から解放されたメッセージそのものとして放出されるものであり、語源的に見ても一種の超常性と関わってくることが確認されるから。

問八　傍線部8のように筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　儀礼的な場においては、「うた」のメッセージそのものが、上手に「うたう」ことよりも重視されるため、そのメッセージが場を共有する人間に正しく伝われば、それで儀礼は完結するものだから。

b　「うた」の巧拙に関係なく、自分の身体器官を使って「うたう」ことにより、そのメッセージが自身に回帰していくとともに、その場にいる者すべてに一種の非日常性を帯びつつ共有されることになるから。

c　「うたう」という行為を通して、「うた」に込められていく超常性は、その巧拙に関わりなく、参加する者に一種の恍惚状態をもたらすものだから。

d　上手に「うたう」ことよりも、いかに本人の身体器官の密度を高めて使うかがイニシエーション儀礼では問題になるのであり、その実行がある団体に所属することの可否を決めることになるから。

問九　次の文章のうち、本文の内容に合致すると思われるものを二つ選べ。

a　意味の理解できない「ことば」であっても、それをうたうことがありうるのは、「うた」の持つ自己回帰性によるところが大きい。

b　セレナーデのような、秘やかに発信される「うた」であっても、そのメッセージは、第三者に伝達されることを前提としている。

c　「うた」に備わった自己回帰性が契機となり、「うたう」際に密度の高い身体性が生じる。

d　ダイアローグの対極として「うた」は存在し、その本質はことばの伝え合いを拒絶するモノローグの中に認められる。

e　「うた」に関連する語彙は、日本、中国、ヨーロッパの別を問わず、その語源には、祈りや呪詛などの何らかの聖性が認められる。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。Aの後半には、Bを踏まえて記されている部分がある。

A　後徳大寺左大臣、小侍従と聞こえし歌よみに通ひ給ひけり。ある夜、ものがたりして、暁帰りけるほどに、この人の供なりける蔵人といふものに、[1]いまだ入りもやらで、見送りたるが、ふり捨てがたきに、立ち帰りて、なにごとにても、いひて来、とのたまひければ、[2]ゆゆしき大事かなと思へど、程経べきことならねば、やがて走り入りて、車寄せに、女の立ちたる前についゐて、申せと候ふとは、[3]さうなくいひ出でたれど、なにともいふべしともおぼえぬに、をりしも里の鶏、声々鳴き出でたりければ、

[4]ものかはと君がいひけむ鳥の音のけさしもなどかかなしかるらむ

とばかりいひかけて、やがて走りつきて、車寄せにて、かくこそ申して候ひつれ、と申しければ、いみじくめでられけり。[5]さてこそ、使にははからひつれとて、後にし[6]る所などたびたりけるとなむ。

上東門院の伊勢大輔が墨するほどに、[7]けふ九重に、といふ歌を案じ得、一間をゐざり出づるあひだに、[8]こはえもいはぬ花の色かな、の末の句を付けたりける[9]心のはやさにも、劣らずこそ聞こゆれ。

かの蔵人は、内裏の六位などへて、やさしき蔵人といはれけり。

（『十訓抄』）

B　道信の中将の、山吹の花をもちて、上の御局といへる所を、すぎけるに、女房達、あまたゐこぼれて、さるめでたき物を持ちて、ただにすぐるやうやある、といひかけたりければ、[10]もとよりやまうけたりけむ、

[11]口なしにちしほやちしほそめてけり

といひて、さし入れりければ、若き人々、え取らざりければ、奥に、伊勢大輔がさぶらひけるを、[12]あれ取れ、と宮の仰せられければ、うけ給ひて、一間が程を、ゐざり出でけるに、思ひよりて、

こはえもいはぬ花の色かな

とこそ、付けたりけれ。これを、上聞こし召して、[13]大輔なからましかば、恥ぢがましかりける事かな、とぞ仰せられける。

これらを思へば、心疾(と)きも、かしこき事なり。

（『俊頼髄脳』）

〈注〉 後徳大寺左大臣…藤原実定（一一三八～一一九一）。平安末期の貴族。

小侍従…生没年未詳（一一二二ころ～一二〇二ころ）。二条天皇・太皇太后宮多子等に出仕。

伊勢大輔…生没年未詳（一〇六〇ころ高齢で没）。上東門院に出仕。

道信の中将…藤原道信（九七二～九九四）。平安中期の貴族。

宮…上東門院（九八八～一〇七四）。藤原道長の娘彰子。一条天皇中宮。

上…一条天皇（九八〇～一〇一一）。第六六代天皇。

問一 傍線部1「いまだ入りもやらで、見送りたる」とあるが、〈ア〉誰が〈イ〉誰を見送ったか。もっとも適切なものを次の中から一つずつ選べ。

a 後徳大寺左大臣　b 小侍従　c 蔵人　d 伊勢大輔

問二 傍線部2「ゆゆしき大事かなと思へど、程経べきことならねば」とあるが、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 自分には大役過ぎると思ったが、和歌は早く詠まないと意味がないと知っていた。

b なぜ自分がするのかと大いに疑問だったが、考え込んでいるひまはなかった。

c 大いに不吉な気がしたが、素早く片付ければ災いが降りかかるまいと、高をくくった。

d 大変素晴らしいことと思ったが、感慨に浸っているひまはなかった。

問三　傍線部3「さうなく」とはここではどのような意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　勢いもなく　　b　そのようでなく　　c　このうえなく　　d　ためらいなく

問四　傍線部4「ものかはと君がいひけむ」は、小侍従がかつて詠んだ「待つ宵のふけ行く鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥はものかは」という歌を指している。それを踏まえた「ものかはと君がいひけむ鳥の音のけさしもなどかかなしかるらむ」の歌はどのようなことを言おうとしているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　あなたは恋人と別れる暁の方が辛いと言ったが、私には恋人を待つ宵が更けてゆく方がもっと辛く感じられます。

b　あなたは恋人を待つ宵に聞く鐘の音が素晴らしいと言ったが、私には恋人と別れる暁の鶏の声の方がもっと素晴らしく感じられます。

c　あなたは恋人を待つ宵が更けてゆくのが辛いと言ったが、私には恋人と別れる暁の方がもっと辛く感じられます。

d　あなたは恋人と別れる暁の鶏の声が素晴らしいと言ったが、私には恋人を待つ宵に聞く鐘の音の方がもっと素晴らしく感じられます。

問五　傍線部5「さてこそ、使にははからひつれ」とあるが、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　逃げ足早く、相手の返歌を待たずに車に追い着く機敏さを見越して、お前を使者に選んだのだ。

b　その場にふさわしい和歌の挨拶で、相手の気持を慰める機転を見越して、お前を使者に選んだのだ。

c　丁寧な和歌の返事で、その場を盛り上げる才能を見越して、お前を使者に選んだのだ。

d　相手の返歌を持ってきてこそ、お前を使者に選んだ意味もあるというものなのに。

問六　傍線部6「しる所」とはここではどのような意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　知識　　b　知人　　c　領地　　d　故郷

問七　傍線部7「けふ九重に」は、伊勢大輔がかつて詠んだ「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな」という歌を指している。八重桜は「けふ九重に」どこで咲いているというのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　平城京　　b　平安京　　c　伊勢　　d　場所は特定できない

問八　傍線部8「こはえもいはぬ花の色かな」は、傍線部11「口なしにちしほやちしほそめてけり」に付けた連歌である。この連歌について正しく述べているものをA、そうでないものをB、とせよ。

a　山吹の花の色はクチナシ色と表現されるということを前提にしている。

b　山吹の花がことばでは表現できないくらい美しいと愛でている。

c　山吹の花は他のどの花よりも美しく素晴らしいと絶賛している。

d　女房達への挨拶の心も含まれていて、女房側からの応酬も楽しんでいる。

e　クチナシという語のおもしろさに興じて、花に対する関心が薄れている。

問九　傍線部9「心のはやさ」とはどのような意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　念入りな準備　　b　激しい情熱　　c　熟練した技術　　d　和歌を詠む機転

問十　傍線部10「もとよりやまうけたりけむ」とあるが、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　道信は、女房達から声を掛けられても、そのまま通り過ぎようと最初から心に決めていた。
b　道信は、女房達から声を掛けられたら、すぐに連歌を詠みかけようと事前に作ってあった。
c　道信は、万一女房達に見つかってしまったら、すぐに山吹の花を贈る予定でいた。
d　道信は、女房達に山吹の花を贈る予定もなければ、連歌を詠みかける予定も最初はなかった。

問十一　傍線部12「あれ取れ」とあるが、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　道信の詠んだ山吹の花をさがして来なさい、と宮は伊勢大輔に命令した。
b　道信を部屋の中に呼び入れなさい、と宮は伊勢大輔に命令した。
c　道信の詠み入れた連歌を見せなさい、と宮は伊勢大輔に命令した。
d　道信の詠み入れた連歌に返事をしなさい、と宮は伊勢大輔に命令した。

問十二　傍線部13「大輔なからましかば、恥ぢがましかりける事かな」とあるが、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　伊勢大輔のおかげで、自分たちまで大いに恥をかいた、と天皇は慨嘆した。
b　伊勢大輔がいなかったら、誰も恥をかかなかったに違いない、と天皇は推測した。
c　伊勢大輔のおかげで、宮に恥をかかせないですんだ、と天皇は感謝した。
d　伊勢大輔がいなかったら、自分たちは見劣りしないですんだ、と天皇は悔しがった。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

しばしば大人は子どもには[1]子ども向けの「神話」を語る。そこでは証券取引に関する常識はもちろん、恋愛についての常識も、ルネサンス美術に関する知識も語られない。あるいは、車輪をもって走るものをすべて「ブーブー」としてくくるような語彙を子どもに向けて大人自身も発するだろう。そこにお子様向けの常識的世界像が形成される。そして子どもは、いったんはそこの住人になることを強いられる。つまり、「子どもらしい子ども」になることを強いられるのである。そこでは語部たる大人もまた、神話の神々として、すなわち[2]能うかぎりの「凡人」として、その世界に住むだろう。そうして、子ども向けの常識的世界像の中で対等のパートナーシップをつかむことによって、子どもに言葉を教えていこうとする。言語教育はそのまま「凡人たれ」という人物教育ともなっているのである。

もし言葉を学ぶことがこの凡人教育の段階にとどまるものであるとすれば、それはやりきれないものであるだろう。だが、ここで[3]意味の自律性の弱い原理、すなわち使用の創造性が重要なものとなる。われわれは標準的言語使用にとどまっているわけではない。標準的言語使用の理解を利用し、そこから逸脱することによって、字義どおりでない発話の力を生み出し、比喩を用い、また皮肉を言ったり、冗談をとばすのである。それゆえ子どもはやがて神話から踏み出し、神話を逆手にとることを覚えねばならない。

ときに、子どもは卓抜な比喩を用いる者であるかのように語られることがある。例えば、脚のしびれに対して、「脚が炭酸になっちゃった」と言うように。私には子育ての経験がないので実感をもって語ることはできないのだが、私の偏見ではこれは実は比喩ではない。子どもはまだ大人の押しつける標準的言語使用をきちんと学びとっていないというだけのことにすぎない。その子はただ[4]字義どおりの意味で「脚が炭酸になった」と言ったのである。そこには使用の創造性はない。それゆえ機知も芸も言葉の美しさもない。それゆえ大人たちはこの誤解された凡庸さをうかつに讃えてしまうのではなく、それをいまの大人たちが共有している伝統的な凡庸さへといったんは押し込めねばならない。子どもが自覚的にはばたけるようになるために、

無自覚にもっているその翼をまずはもぎとらねばならないのである。[5]

狭い意味での言語教育はここまでである。それは標準的言語使用を常識的世界観とともにたたき込む過程にほかならない。だが、大人の教育者としての真価が問われるのはむしろここからだろう。[6] 大人はそこにおいてもはや教えてはならない。ノコギリを楽器として用いることを教えてしまったならば、それはたんにノコギリという楽器が神話の内に取り込まれるだけでしかない。お父さんが「塩がない」と言ったときには塩を手渡さなくちゃいけないんだと教えることは、ただ「シオガナイ」という音の標準的使用のひとつとして命令の言語行為を教えることでしかないのである。大人はただ、子どもが紋切型でない言語行為を為し、紋切型でない比喩を作り出し、また紋切型でない皮肉や冗談を言ったときに、その「子どもらしくなさ」を愛でる観客であるしかないだろう。

ある人たちには、いまのわれわれの周囲には「変」なものが満ちあふれているように見えるかもしれない。だが、私の目にはたんに多様化したさまざまな「ふつう」が満ちているように見える。多様化されつつもなお、それぞれにそれぞれの「らしさ」を演じようとしているように見える。それは細分化され、自閉しつつ、最後には「自分らしさ」というなんだかわけの分からないものに行き着くのである。

伝統的な神話は確かに弱体化した。だが、神話への呪縛は圧倒的にわれわれを縛り続けている。そうして伝統的な神話からはみ出した者たちは、自分を「ふつう」の者として位置づけてくれるような新たな神話を作ろうとする。[7] それはそれで別にかまわない。神話は不可欠なのだから。だが、自ら選びとった神話というものは押しつけられた神話よりもはるかにタチが悪いことを忘れてはならない。押しつけられた神話であれば、それへの反発からそれを逆手にとる力も生まれてくるだろう。それに対して自ら選びとった神話を逆手にとることは難しい。自分らしさへの偏愛は、態度をかたくなにし、足取りを重くする。

ここで私は「諧謔（かいぎゃく）の精神」について思わずにはおれない。諧謔は常識のもとでのみ可能となる。だが、常識の中では不可能である。私には、諧謔こそ、神話との戯れにおける最大の武器であるように思われる。[8]

（野矢茂樹『哲学・航海日誌Ⅱ』より）

問一　傍線部1〈子ども向けの「神話」を語る〉の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　子どもにもわかるような形で大人の常識を語る。
b　子どもにしか通用しないような言葉遣いをする。
c　子どもにもわかるような世界を作って教えこむ。
d　子どもの常識でもわかるような事実のみを語る。

問二　傍線部2〈能うかぎりの「凡人」として、その世界に住む〉とは、子どもに対するどのような態度を示しているか、もっとも適切なものを一つ選べ。

a　常識まで引き下げた視点を持つことで、子どもがその常識的世界像の理解を利用できるようにする。
b　子どもとおなじ常識で世界を見る者に扮(ふん)しつつ、子どもの創造的な言語使用をうまく引き出すようにする。
c　子どもが理解できない知識については知らないふりをして、だれにでも平等な言語使用を教えていく。
d　子どもの常識的世界像からなるべく逸脱せずに彼らと接しながら、標準的言語使用を押しつけていく。

問三　傍線部3〈意味の自律性の弱い原理〉の説明としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　言葉の持っている意味が一義的でなく、複数の意味が存在していること。
b　言葉が持つ特定の意味について、複数の言語使用が存在していること。
c　言葉の意味が固定しておらず、言語使用によって次第に定まっていくこと。
d　言葉の持っている意味という側面が、他の諸側面に比べて目立たないこと。

問四　傍線部4〈字義どおりの意味で〉が示すことがらとして適切でないものを一つ選べ。

a　大人の標準的言語使用での理解を利用していない。

b　子どもの世界での標準的言語使用を理解している。

c　標準的言語使用から逸脱しているという自覚がない。

d　本人は「脚が炭酸になっちゃった」と思っている。

問五　傍線部5〈その翼をまずはもぎとらねばならない〉の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　創造的な言語使用ができるようになるために、伝統的な言語使用における字義どおりの理解を押しつけること。

b　標準的言語使用から逸脱できるようになるために、子どもが紋切型でない言語行為を行わないようにすること。

c　標準的言語使用の理解を利用させるために、まずはそこから逸脱した言語使用をしないように教育すること。

d　伝統的な常識的世界観を打破するために、伝統的な言語使用の標準型を子どもにいったんは押しつけること。

問六　傍線部6〈大人の教育者としての真価〉の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　子どもに機知や美しさに富んだ言語使用を示すための役割を果たせるかどうか。

b　子どもが伝統的な言語使用を正しく理解するための役割を果たせるかどうか。

c　子どもに常識的な言語使用からの逸脱を教えるための役割を果たせるかどうか。

d　子どもが創造的な言語使用を自覚するようになるための役割を果たせるかどうか。

問七　傍線部7〈新たな神話を作ろうとする〉の説明としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　紋切型でない言語行為によって、常識的世界像を逸脱していこうとする。

b　常識的世界像から逸脱している自分の自分「らしさ」を正当化しようとする。

c　伝統的な常識とは異なる自分らしさである「変」をどこまでも追求しようとする。

d　伝統的な神話とは異なる神話を自ら選びとることが不可欠であると見なす。

問八　傍線部8〈諧謔こそ、神話との戯れにおける最大の武器である〉と述べられる理由として適切でないものを一つ選べ。

a　諧謔は、多様化され自閉していく「ふつう」に逆らう能力であるから。

b　諧謔は、常識へ反発し、それを逆手にとる力を与えてくれるから。

c　諧謔は、新たな神話に呪縛されつつ、その神話を批判できる能力であるから。

d　諧謔は、常識を逸脱し、常識から踏み出す新たな力を与えてくれるから。

e　諧謔は、自ら選びとった神話への偏愛に呪縛されることを拒む能力であるから。